

二〇二五年度

恵泉女学園中学校 第三回 入学試験問題

国語（四五分）（全二ページ）

注意 一、開始のチャイムと同時に、問題用紙と解答用紙にそれぞれ受験番号と氏名を記入しなさい。

二、答えはすべて解答用紙に書きなさい。

三、字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。

受験番号
氏 名

一、シッカはブラジル人の父と日本人の母を持つ中学二年生です。容姿のことだからかわれ、自分でも気にしています。一方、同じクラスの巧の母はフィリピン人ですが、不法滞在で強制送還となりました。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文には、一部改めたところがあります。）

遅い夕飯は、久しぶりに父親がお店から持ち帰ってきたフェジョアードと炊きたてご飯、パモニーヤ、それからランチビュッフェの余りのサラダ。フェジョアードは豆と肉類の煮込み料理で、パモニーヤはトウモロコシ粉で作ったブラジル版ちまきだ。

テーブルに並んだフェジョアードを見て、シッカはうんざりした。

絶対くるぞ、と確信したからだ。

A、教室帰りのママと、パパと、シッカで囲んだ夕食の最中に、パパのミゲウが何気ないふうに切りだした。

「そうだシッカ。今度の夏休み、少し長めにサンパウロに滞在しないか？ おばあちゃんの作るパモニーヤは一級品だよ。……父さんは、シッカに、ブラジルのこともうちよつと知ってほしいな。袖振り合うも多生の縁というだろ。シッカはブラジルの魂を受け継いでいるんだから、もつとだ」

やつぱり、とシッカは辟易した。

トイレに昔から『日本ことわざ辞典』が置いてあり、「開いた口へぼた餅」とか「千丈の堤も蟻の一穴から」とか、日本のことわ

さを妻の由美よりよく知っている父にも、ブラジルへの強い思いがあるのだろうか。

ミゲウが日本でブラジル料理店を開いて、今年でちょうど二十年になる。ブラジルのリオデジャネイロで妻の由美に出会い、日本に移住し、シッカが生まれた。ご近所付き合いも好きだし、シッカの目にはすっかり日本に溶け込んで暮らしているふうに見えるのだけれど。

「へえ。いいんじゃない、シッカ？」

由美は、ミゲウの話にほがらかに相づちを打っている。

由美がシッカを産んだのは三十七歳だから、今年の八月で五十一歳のママになる。もうけっこうな歳なのに、サンバ教室のカラーに合わせているのか知らないが、やたら化粧が濃い。小学生のころから、クラスの中でもかなりの高齢ママなのに、原色の洋服とど、ピンクの口紅で参観にくる由美が、心のどこかで恥ずかしかった。

「そういえばね。今年の浅草のカーニバル、新規出場のチームが二つもあるんだって。わざわざ、福岡からくるらしくって。何でもブラジルにダンス留学した人がリーダーでね、すごくレベルが高いチームで……」

ミゲウの話が終わるやいなや、目をキラキラさせて、サンバの話。こっちもまたか、とシッカは嫌気がさす。パパはブラジル、ママはサンバの話ばかり。⁽¹⁾ブラジル料理とサンバのサンドイッチとか、最悪だ、最悪。

不機嫌に黙りこくって、ご飯のプレートにフェジョアードの汁を乱暴にぶっかけているシッカのようすに気づかず、由美はサンバ

トークに余念がない。

腕の振りがどうの、腰のバウンスがどうの、まるきり興味のないダンスの話を右から左に聞き流しながら、シッカは巧のことを考えていた。

巧の家が、そんな大変なことになっていたなんて。本人はそんなそぶりを少しも見せていなかった。先生はきっと知っていたのだろう。でもクラスのみんなは知らないはずだ。たぶん、クラスの中で、シッカだけが知っている秘密……。

明日巧に会ったとき、どんな顔をすればいいのかわからない。サンババアと罵るとき、巧はいったい何を考えているのだろうか。

（樹里のばか。おしゃべり）

巧のママの話なんか、聞かなければよかったのに。

「お教室の内田さんも、今年こそ自前で衣装をそろえるってはりきってるのよ。それで――」

どピンクの口紅の残る唇がしゃべりつづける。

もう、うるさい。

気がつくとき、さっきまで座っていた椅子が後ろに倒れていた。椅子を蹴りとばすようにして、席を立つ。テーブルがしんと静まりかえる。

目を丸くしている両親に向かって、声を荒らげた。

「サンバの話なんか、もういいよ！ あたし、サンバって大つつ嫌い！」

やっとまずいことに気づいたという表情で、由美がおずおずとシッカにささやく。

「——どうしたのシッカ。学校で何かあったの？ 何か嫌なこと、言われた？」

「べつに、って言ってほしい？」

サンバのせいで嫌なことを言われるかもしれないって自覚はあるんだ、と皮肉に思う。そこまでわかるのに、シッカの気持ちだけ、わからないのか。

「シッカ、母さんは……」

身を乗りだしたミゲウをきつとにらみつける。

「パパだって、最近ブラジルのことばかり言って、何よ。あたし、ブラジルなんかに興味ないのに」

「でもパパイの故郷だよ。おまえのふるさとでもある。シッカは日本生まれの日本育ちだけど、パパイは、せんたくし選択肢は多い方がいいと思っているよ」

「——それって、こくせん国籍選択のこと言ってる？」

「国籍なんて気にしなくていい。おまえはれっきとした日本人だし、パパイが言ってるのは人生をもっと豊かにするための、そうだな……心の選択肢みたいなものことだよ。パパイはただ、一度シッカにブラジルの空気を吸ってほしいんだ。ブラジルには、日本

からの移民がたくさんいて、昔から現地に溶け込んで暮らしている。みんな、シッカを歓迎してくれるよ」

ミゲウは穏やかな表情でシッカを見つめる。

⁽³⁾ 優しく教えさとするような口調に、シッカはひどくイラッとする。

何が心の選択肢だ。どうして、シッカまでブラジルに興味があるかのように話すのだろう。押しつけたとは思わないのだろうか。れっきとした日本人だなんてよく言えるよね、と出かけた言葉をぐっと呑み込んだ。

だいたい、ブラジルで歓迎されて何になるのだろう。ブラジルは父親のふるさとであって、ミゲウの言うとおり、シッカは日本で生まれた日本の子だ——見た目はどうあれ。故郷のほずのこ、ここで居場所のない自分が、異郷でなら愛されるかもなんて、どうでもよすぎて、泡になって弾けそう。

シッカの悩みは、行ったこともない遠いブラジルなんかにはない。

いま、ここ、目の前にしかない——。

クラスの壁に貼りつけられたニセモノの自画像。巧の冷たい眼差し。本音を伝えることもできない親友がストローですすったブラクタピオカ。それがいまの、シッカの悩みのすべてだというのに。

「……いいかげんにしてよ……」

火山になったシッカの口から溶岩がどろっとあふれだす。

「勝手すぎるよ。ママはサンバを選んで、ブラジル人のパパを選んだ。パパはママと日本を選んで、日本に住んでいまハッピー。よかったじゃん」

手元のスプーンをにらんでいた視線を上げて、やっと両親の顔を見まわす。

「……でもあたしは、何にも選んでないのに、こうなつた。ママだってさ、うちの学校でサンバ、バ、バ、って呼ばれてんの知ってる？ い歳して、サンバでも何でも勝手に踊ってればいいけどさ。あたしを、巻き込まないでよ！」

由美がぎくりと顔をこわばらせた。いつかテレビで見た、漁で船揚げふなあげされてすぐに電気ショックで殺されるマグロみたいに、一瞬いつしゆんで、目がうつろになった。ミゲウはまったく言葉をなくしている。

これまで、大声を上げてキレたこともほとんどないし、傷つけようとして母親を傷つけたこともない。母方の祖母の形見かたみのピアスを排水口はいすいこうに落としてしまったときも、授業参観にきた由美と目を合わせなかったときも。

(でも、ママがサンバをやっていなかったら、こんな思いをせずにすんだのは事実じゃない)

いまのシッカは、「傷つけてごめんなさい」どころか、青ざめたママの顔を見てザマアミロなんて思っている、いやな子だ。悪(4)

意というやつは、返す刀で自分を斬きる。電気ショックを受けたのは、シッカも同じだった。

(中略)

家に戻ると、母親はリビングにいた。部屋着のままソファに座っている。リビングには、甘い香りがただよっていた。

はちみつをたっぷりかけたポン・デ・ケージョは、由美の唯一のブラジル料理のレパートリーである。ポン・デ・ケージョとは、タピオカ粉に卵や牛乳などを入れ、チーズを練り込んで焼く一口大のパンだ。

シッカが小さなころ、チーズ味のポン・デ・ケージョに甘いはちみつをかけて食べるのが大好きだった。だから、由美はいまでもときどきポン・デ・ケージョを作ってくれる。だいたいは、お説教の前触れとして。

「ポンさんあるわよ」

シッカが自室に行かないように、ママが行く手を通せんぼして切りだした。昔からポン・デ・ケージョのことをポンさんと呼ぶ由美に、シッカは黙ってうなづく。

「さつき、巧くんきてくれたわよ。アースビレッジでいっしょだった」

「うん。公園で会った」

「……目、赤いね」

あくまで遠回しな由美に、うんざりした。無断欠席のこと、聞きたいなら聞けばいい。ただでさえ、頭が混乱して爆発しそうなのに。

「——探るの、やめてよ。はちみつかけたポンさんとかさ。小っちゃい子にするみたいに、イイコイイコしないで」

すると、由美のノーメイクの顔にあきらかな苛立ちがはしった。

「小っちゃい子じゃない、最近のあなた」

「……は？」

「イイコイイコされるの、待ってるじゃないの。何がコンビニよ。夜に外出なんかして。パパはもう少し放っておこうっていうけど……」

「はい？ 意味わかんないし」

シッカはつい声を荒らげた。そんなふうに使われていたのかと思うと頭に血がのぼる。

「わからないのはママの方よ。じゃあ、いったい何を言ってるのよ」

「べつに、なんか言ってるのよなんて思ってるのよ。だいたいママなんて、いつも言いたいことしか言ってるのよ」

「なによ、その言い方」

ついに由美の声も大きくなった。すっぴんときは、なきに等しい眉が^{まゆ}つり上がっている。

感情だけがどんどんヒートアップして、⁽⁵⁾
B 言葉に C 言葉。中学に上がったくらいから、母親と真面目^{まじめ}な話をしよう

とすると、だいたいこうなる。最後には、由美が怒鳴^{どな}る寸前までいって、シッカは黙り込むというパターンだ。

由美は、怒^{おこ}っているというよりは、悔^{くや}しそうに唇をかむ。

「……サンバはママの生き方なんだから、そのことでは謝^{あやま}りません。ママにはママの人生があつて、子どもであつてもそれを否定す

ることはしてほしくない。シッカの生き方を、ママが邪魔じゃまできないように。何て呼ばれてもいい。ママは、サンババアじゃないときより、サンババアなときが幸せなんだからね」

——ほんと、うんざりだ。

シッカはため息をついた。だれも謝ってほしいなんて言っていない。結局は自分の話だ。母はいつだって世界の中心にいる。

「でも、あなたまで、学校でサンババアって呼ばれてるって」

「……………」

シッカは警戒心けいがいしんいっぱい身構える。きつとまた、魔法まほうのチョコみたいなくわらない呪文じゅもんでシッカの気持ちをうやむやにしよ
うとするに違いない。

だが、由美が言ったのは思いもよらないことだった。

「ママのせいだね。もっと早く聞けばよかった。……気づかなくてごめんね」

シッカは驚きおどろに目をみはった。

覚えているかぎり、由美にまともに謝られるのはこれがはじめてだった。やばい、と思ったときには、⁽⁶⁾バリアけつかいが決壊けつかいしていた。

（黒川裕子『夜の間だけ、シッカは鏡にベールをかける』より）

問一 A にあてはまる最も適切な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 例のごとく イ 藪^{やぶ}から棒に ウ 思いの外 エ 案^あの定

問二 ⁽¹⁾ ブラジル料理とサンバのサンドイッチ とは、どういうことですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 毎日のようにブラジル料理を食べたり母のサンバの話を聞かされたりしているので、代わり映^はえのない日常に嫌気がさしているということ。

イ ブラジルへ行こうという父の話が終わったと思ったら、母もブラジルに関係のある話を立て続けにきて、追い打ちをかけられたということ。

ウ ただでさえ苦手なブラジル料理を夕飯に出されたうえに、母からサンバの話をされ、嫌な気分が何層にも積み重なっているということ。

エ 父からはブラジル行きをうながされ、母からは聞きたくもないサンバの話をされて、ブラジルにはさまれて逃^にげ場がないということ。

問三 どピンクの口紅の残る唇がしゃべりつづける⁽²⁾ という表現から、どのようなことがわかりますか。ふさわしいものをすべて選

び記号で答えなさい。

ア 年齢をわきまえず派手な化粧をしている母親への嫌悪感^{けんおかん}。

イ 可愛い色の口紅で父の気をひこうとする母親への嫌悪感。

ウ サンバの話になると周りが見えなくなる能天気な母親への嫌悪感。

エ ブラジル料理にとどまるところを知らない食欲を見せる母親への嫌悪感。

問四 優しく教えさとするような口調に、シッカはひどくイラッとする⁽³⁾ とありますが、なぜ「イラッとする」のですか。その説明と

して最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 父がシッカの悩みを理解していないのに、まるでシッカの方がわからず屋のようにされているから。

イ シッカは自分の気持ちをはっきりいわけではないのに、寄り添^そおうとする父の態度が的外れだから。

ウ シッカがこれまでため込んでいた不満をぶつけているのに、全く取り合おうとしない様子だから。

エ 父は本気でシッカのことを心配してはいないのに、いかにも良い父親らしい態度で接してくるから。

問五 悪意というやつは、返す刀で自分を斬る。とはどういうことですか。本文をふまえて説明しなさい。⁽⁴⁾

問六 ⁽⁵⁾
 B 言葉に C 言葉 とありますが、 B 、 C にあてはまる語をそれぞれ答えなさい。

問七 ⁽⁶⁾
 バリアが決壊していた。とはどういうことですか。説明しなさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

私は日ごろ詩を書いたり、散文を綴ったりしているが、いずれの場合においても最もむずかしいのは、自分が一番力を入れて書くとして、いけば思い詰めて考え、人に伝えたいと思っている一番大事なことをどう表現するかという問題である。強調したいことは最上級の言葉で語りたいと思うのが自然の要求であって、その誘惑は強い。けれども、私たちが採っている最上級の表現というものは、皮肉なことに、たいていの場合は出来合いのものである。概念的で通念によって汚され、ひからびた表現である場合がほとんどである。⁽¹⁾ その例証は政治家たちの用語の中にもいくらでも見いだすことができる。

最も明瞭に人の心に叩きこみたい思いを表現するには、出来合いの大げさな表現と正反対の方向へむかって道を探さねばならない。すると、その瞬間から、何が最もその場に適した表現であるかについての、闇夜の手探りに似た状態に投げこまれる。通念の次元ならきわめて通りのいい種類の言葉を投げすてた瞬間から、人はつねに、最初の一語をどう発するか、という、いつの時代にも変わらない表現者の初歩的で究極的な困難に新たに直面しなければならない。

私はこういう問題について思うとき、よく中原中也が日記だったかエッセイだったかの中で書きしるした言葉を思いおこす。中原は「問題は紛糾してはいない。野望が紛糾しているだけだ」とそこに書いていた。^(注) 含蓄ゆたかな思想である。たしかに、問題は紛糾してはいない。人間の拠って立つ根本のものは、そんなに複雑多岐にわたっているわけではない。いつの時代にも人は生活者とし

(注) 含蓄…表面にはあらわれない味わいのある深み。

⁽²⁾

て生き、愛し、語り、書き、読みということを繰り返して、いかに重要な問題もその範囲の外にあるわけではなかった。

もちろん一人の人間の「生活」は複雑多岐であり、必然的に表現も複雑多岐であらざるを得ない。けれど、それは依然として日々のささやかな営みの中で徐々に組織され、構成されてゆくものであつて、その事情は、表現の細部をとつてみれば、どの細部もそれ自体としてはささやかなものであるという事実と正確に照応し合っている。よく構成され、稀有な関係を形づくるにいたつた(3) ささやかなものの集まりが、巨大な結果を生むのであり、その巨大な結果とは、人間の拠つて立つ根本のものを、じかに背負っているものにほかならない。

そういうことを考え合わせれば、大げさな言葉がわれわれを感動させず、逆に、つましく発せられたささやかな言葉が、しばしば人を深く揺り動かす理由も納得がゆくだろう。

(中略)

現代においては言葉を贈物にするという思想は、われわれのなかに自覚的にはあまりないと思われるが、平安時代あたりには、言葉は時に最高の贈物だった。

それはどういう意味かというと、言葉の贈物が男女の間で決定的な役割をはたすことが多かったからである。もちろん、それは和歌というものを日常の生活必需品としていた貴族階級のことだが、彼らの間では相手に近づこうとするとき、相手に贈る最も重要な贈物は、歌だった。歌は、一度も顔を見てさえいない女を口説きおとすのに用いられる名刺代わりの挨拶であり、個性と教養の見せ

場であり、もちろん誠意の披瀝ひれきの道具だった。それに対する女の返歌は、彼女の運命を決定する可能性のある意思表示の唯一ゆいいつの手段だった。

その贈答ぞうたうは直接本人同士が手渡しわたするわけではなく、使いの少年などを走らせたのだった。歌をしるした手紙は、季節季節に咲いている花の枝とともに相手のもとにとどけられた。花もまた、言葉の補助手段として用いられた。女はそれらを見て、すぐに返し之歌を書く場合もあったし、にぎりつぶすこともあった。男も同様である。何といっても女のほうが真剣しんけんに相手の歌を見ただろう。歌を読んで、この男は実がありそうだとか、才能が非常にありそうだとかの判断を頭の中で真剣はんすうに反芻はんすうしたはずである。

そういう形だったから、これはまことに不安定な求愛であり、返答だった。それで最後に、結ばれたり結ばれなかったりする。女は、幸福になったり不幸になったりする。その運命を決めるべくかわされている歌というのは、したがって、なかなかもって重大な贈物といわねばならなかった。言葉を贈る。その贈物が相手に気に入るか入らないか、それが明日からの生活を左右することにもなった。

A、なぜ言葉のようなものが贈物になり得たのだろうか。 B、和歌一首一首はじつにささやかなものにすぎない。今

日私たちが読むことのできるそれらの歌の数々を読んでみれば、それらのあまりの平凡へいほんさにかえって驚おどろかされるというようなものである。それも当然のことだった。五七五七七、わずか三十一文字の和歌というものは、どんなに工夫くふうしてみてもごくわずかな事柄ことしがらしかいえない。 C、それは一度にはわずかなことしかいえないがゆえに、 D 徐々に相手の言葉に浸透しんとうしてゆくものと

なり、贈答の繰り返しを通じて、しだいに互いの心が見えてくるという効果が生じたのだった。

われわれが人に贈物をするときのことを考えてみると、この問題は一層よくわかるだろう。つまり、だれかに贈物をする場合、金額の非常に張ったものをいきなり相手に贈りつけたとする。相手のほうでは驚く。まともな人間だったら、なんでこんなものを贈ってきたのかといぶかしく思い、迷惑さえ感じるのが普通である。はては逆に

X

にさえなるかもしれない。いったいなにを考えてこんなことをするのか、この人は？ 不釣合に高価なものを贈るということは、相手を落ち着かなくさせる点で逆効果さえあるだろう。ささやかな贈物こそ、かえって人の心をよく相手に伝える。

たとえば貧しい青年と娘が好き合ったとき、どんな贈物をするだろうか。物は贈れなくとも、言葉を贈ることはできるだろう。ある日二人はどこかへピクニックに行く。美しい山があり湖がある。仮に——こんな言葉はキザに聞こえるかもしれないが——青年が恋人に向かって、「今日のこの風景を君にあげよう」と言ったとする。その言葉が、娘にとっては永く忘れられない贈物として心に残るということは、ありうることである。その風景は万人のために存在している風景だけれども、愛し合う二人にとっては、他のだれにも見えない光がその風景を照らしているのであって、つまり、それは二人だけのための風景なのだった。男のささやかな言葉を通して、一つの風景は娘の中に、ほかの人には見えないある輝きとともに、別の一風景となって棲みつく。すなわち彼女は、他の何ものをもってしても替えがたい贈物を受け取るのである。目の前の風景は、そういう一人の人間の発する言葉が付け加わることによって「贈物」となる。

たしかに、贈物というのはささやかなものであっている。ささやかだからこそ、それをもらったほうでは、自分の心の中でそれを暖め^{あたため}、もてあそび、楽しむことができる。大切なことは、まことに平凡な話だが、心がこもっているかいないかにあつて、物や金額の大小にはない。「今日のこの風景を君にあげよう」という言葉が、それを発した青年とそれを聞く娘との関係において、豊かな音楽を奏^{かな}でるかどうかが、大切な唯一のことである。

「言葉の力」というとき、まず私の念頭に浮かぶのはこういうことにほかならない。

(大岡信『詩・ことば・人間』より)

問一 ⁽¹⁾ その例証は政治家たちの用語の中にいくらでも見いだすことができる。とありますが、「その例証」の説明として最もふさわ

しいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 演説で「私は○○党の△△です」とよく言うが、組織の力に頼^{たよ}って当選しようとしているだけである。

イ 公約で「明るい未来を」とよく言うが、どこかで聞いたような表現で政治家自身の思いが伝わってこない。

ウ 演説では「国民のために」とよく言うが、実現することは不可能なので不信感を抱^{いだ}いてしまう。

エ 非難するときに「誠^{まこと}に遺憾^いである」とよく言うが、反発^{おそ}を恐れて遠回しな言い方をしているだけである。

問二 問題は紛糾してはいない ⁽²⁾とありますが、そう言えるのはなぜですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号

で答えなさい。

ア 表現者は人間のあらゆる側面を余さず語りたいと願うけれども、人間の生活の根本はきわめて単純で変わりばえのしないものだから。

イ 表現者が人の心に叩き込むにはどうしたらいいかと最上級の言葉を探しても、結局は出来合いの表現であって、誰でも知っている言葉だから。

ウ 表現者が人に伝えたいと思うようなことは、人間が繰り返し行う営みの範囲内であって、それほど他者との共有が難しいわけではないから。

エ 表現者は最初の一語をひねり出すことに全身全霊^{ぜんれい}を傾けるが、そのような表現の細部は全体からみればささやかなものにすぎないから。

問三 ⁽³⁾ささやかなものの集まりが、巨大な結果を生むとありますが、後に出てくる和歌の例ではどのようなことですか。四〇字以

内で説明しなさい。

問四

A D

にあてはまる最も適切な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使つてはいけません。

ア 思うに イ かえつて ウ けれども エ ところで

問五

X

にあてはまる最も適切な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 支離滅裂 イ 五里霧中 ウ 一触即発 エ 疑心暗鬼

問六

次のア～オの文について、本文の内容に合っているものには「A」、そうでないものには「B」と答えなさい。

ア 決まりきった言葉ではなく、常に目新しい表現で自分の真心を相手に伝えていくべきだ。

イ ささやかな言葉であるがゆえに、贈られた側は何度も繰り返し味わうことができる。

ウ 技巧を凝らした表現を使わなくても、心がこもっていれば相手に思いは伝わるものだ。

エ 最上級の表現を求めているのは、人々が無意識のうちに幸福な運命を望むからである。

オ 人間の複雑な「生活」も、その細部を見ればささやかな言葉で表現できるものである。

三、次の①～⑤の文のカタカナを漢字に改めなさい。

- ①社長としてのシシツが問われる。
- ②家元にシジして日本舞踊ふようを習う。
- ③図鑑ずかんは知識のホウコだ。
- ④シャソウから見る富士山。
- ⑤総会で議長をツトめる。